

日本とインドの文化の違い

The Differences between Japanese and Indian Culture

塩谷 サルフィ マクスーダ

公立小松大学

1. インドと日本を繋ぐ道、カシミール！

カシミールは、山のシルク・ロードとも言われ、私はこの美しい山に囲まれた、スリナガルの盆地で生まれました。最近話題になっているこのカシミールは、過去には、農業・牧畜が行われ、カシミア織を生産する町でした。自然の景観が美しいこの地域は、映画産業が繁栄する場所であり、ハリウッド映画の撮影にも使われる場所でした。もっとも、残念ながら現在ではカシミール紛争を取り上げた映画も作られています。

2. インドと日本の発展

日本にはインドから仏教をはじめ、多くの文化がもたらされ、思想、哲学の分野でも直接的または間接的に影響を受けてきました。奈良時代の東大寺大仏の時代から繋がりがあります。大天才弘法大師空海はインドの古典語であるサンスクリット語を勉強し、梵語をもとにひらがな表を作り、今の日本の教育に大きな役割を果たしています。また、明治時代、日本が世界に門戸を開いた際に、インドは日本への産業の原材料供給国でした。そして日本人とインド人の交流について検証してみると、この時の日印交流が、近代日本と世界の国際関係を理解する一助になるのではないかと感じています。

反対に、インドも日本から多大な影響を受けています。最も代表的な例として、インドの詩人・哲学者のラビンドラナート・タゴール（初めてのアジア人ノーベル賞受賞者）は日本の画家である岡倉天心ととても仲良くされていて、インドに初めて日本語学校を作りました。タゴールは、日本が明治時代からの急速な近代化を成功させた背景には、「日本人の崇高な精神」があるのではないかと考えていました。岡倉はインドで日本文化を伝えましたが、岡倉の伝えた日本文化の根底にある美的感覚がインドの急速な近代化を可能にしたのではないかと考えています。このように、産業、アート、建築、文学、音楽、ダンスなど、多岐の分野に渡ってインドと日本には昔から強い相互の繋がりがありました。

3. インド独立運動と日本

インド独立運動の際にスワミーヴィヴェーカーナンダは自国のインド人に対して、日本を見本にして自分を高めて欲しいと訴えました。そしてセバス・チャンドラ・ボースとビハリー・ボースはインド独立運動に邁進し、その活動は東南アジア諸国にまで及びました。当時の日本はイギリスと日英同盟を締結しており、イギリスのお尋ね者であるビハリー・ボースに国外退去命令が下ります。その時ボースを助けてくれたのは新宿中村屋でした。そこでボースは相馬夫妻に匿われ、後に相馬夫妻の娘と結婚をします。命がけでボースを匿った相馬夫妻はインドの独立運動の陰の功労者だと思われています。また、ボースが相馬夫妻にカーライスを作り振る舞ったのが縁となり、中村屋は昭和2（1927）年に「純印度式カーライス」を発売します。第二次世界大戦では、日本はアメリカから批判されましたが、インドからは独立の獅子として崇められ、インドの独立に多大な影響を与えました。

4. 戦後のインドと日本

そしてまた、第二次世界大戦で敗戦した日本を擁護し、サポートしたのもインドです。ラダビノード・パールは、日本の戦争犯罪を裁いた東京裁判（極東国際軍事法廷）の11人の判事団にインド代表として加わった人物です。東京裁判では、東條英機元首相ら戦争指導に中心的に関わった政治家や軍人らが「通例の戦争犯罪」だけでなく、「平和に対する罪」「人道に対する罪」に問われ、25人が死刑や禁固刑などの判決を受けました。パール判事は、日本が戦争を開始した時点で、戦争は国際法上違法とされており、「平和に対する罪」「人道に対する罪」は「事後法」にあたり、罪刑法定主義の原則に反すると主張しました。軍事裁判とインド ラダ・ビノード・パール判事 このことは2007年8月に、インドの国会で安倍首相が演説し、インド国民に感謝の思いが伝えられました。

5. 私が来日した頃

1987年、日本は、高度経済成長の只中で、戦後の感謝は忘れられ、インドについてほとんど誰も知らない時代でした。そのようなインドの情報が乏しい中でも、仏教の教えやカレー、なかには幼い頃に話題になった「インディラ」象の記憶などからインドに興味を持った人達を中心となり、私は石川インド協会を設立しました。その後29年、日本とインドの関係は、大きく進展しました。特に、2000年8月には石川県出身の森内閣総理大臣がインドを訪問し、「日印グローバル・パートナーシップ」を調印してからの両国の関係は素晴らしく、日本の『貧しい、汚い』、『仏教の聖地巡り』、『バックパッカー』というイメージだったインドが、『世界遺産巡り』『リゾート地』『ビジネスツアー』というイメージに時代とともに移り変わりました。そして今ではインドから高度な人材、観光客、優秀な学生らがたくさん来日するようになりました。

6. インドの知識

ここで、インドについて少し知って頂きたいと思います。インドの教育は英語で教えられ、小学・中学・高校までは10年生までであり、その上は上級高校が2年間あります。そして飛び級制度によって年齢に関係なく卒業でき、卒業時の全国共通試験で進学が決まります。大学入学試験は無いのです。ですから、高等教育、いわゆるエリートへの道を目指す学生は必死で勉強をします。インドの労働者層の50%は25歳以下の若者であり、国を支えている力はまさに彼らだと言われています。

また、インド人は数字の数え方も独特です。例えば、日本では「1、2、3」と数える時、指を折り、1本ずつ数えますが、インドでは指の関節一つを「1」として数えます。なので両手で30まで数えることができます。ゼロを発見したのもインド人です。

そして学校の先生は神様の次に偉いとされています。なぜなら、国を支える二つの柱は、「家庭」と「教育」だと言われているからです。このように、インドでは能力を活かすには基礎がなくてはならないと言われます。そのため個人を尊重し、能力をのばす創造性を培い、自立の精神を養います。

7. 多様国家

最後に、インドはバラバラで一つの国です。たくさんの民族、たくさんの文化、たくさんの言葉—でもみんなインド人です。それはさしずめインドのカレーのようです。いろいろなスパイスを混ぜながら、最高の味を引き出す。インドの国の人々もこのスパイスのように、多種多様な民族、宗教、言語、肌の色、食べる物、着る物、習慣、伝統など、そのすべてが違うけれど、ブレンドすると、何ともいえない味わい深い交流ができるのです。夏野菜のナスは、どんな料理に使っても、自分の味を失うことなく美味しくしてしましますが、インド人がまさにそうなのです。どこの国に行っても、その国を自分の国のように愛し、その国のよさを自国に持ち帰るとともに、住んでいる国から授かった恵みに感謝し、自国のように愛国心を持って、その国の国民の一人として、その国を愛します。

「秋の涼しげに、
浮かぶ雪の兆し、
思うふるさと。」

本稿は、2020年6月20日から7月19日までに行われた全5回分の公開講座「世界を知る：今なぜ異文化理解なのか」のうち、6月20日の第1回講演「日本とインドの文化の違い」を、講演者の手によりまとめたものである。